

英國 Pali Text Society の近業素描

——特に Pali Tipitakam Concordance ——

佐々木 現 順

最近齎らされた外國の佛教研究の中から今は唯、英國殊に英國に於ける巴利佛教研究に就て其の諸業績のみを略述することにする。

米佛等に就ては、諸種の好條件の下でかなり詳細に記述せられてゐるが、英國の斯界に於ける紹介は必ずしも多くはないと考へたからである。特にロンドンの巴利テキスト協會のホーナ女史から協會の名を以て種々の事情と共に日本に於てその幾つかを紹介して欲しいといふ依頼もあつたから特に同協會を中心にした。

ロンドンの巴利テキスト協會が巴利佛教研究の上に多大の貢獻と基礎を與へて、殆んど斯界の先覺となつてゐることは學者の知るところである。

(一) 既刊書。(1) テキストとして従來までに出版されてゐるものは一八八四年 *Abhidhammattha-Sangaha* 以來、一九四九年 *Petaikapadesa*, ed. A. Barua に至るまで總じて百四十種に及び、(2) シヤーンナルは一八八二年—一九二七年に至つてゐる。(3) 巴英辭典は一九二一—一九二五年の間にリス・デヴィズ並にステード編纂のものが一般に利用されてゐるものであるが一九四九年に五百部再版され、更にホーナー氏の通知に依れば三百

が第三版として出版されようとしてゐる。此等は需要を満し切れぬ内に各方面より求められ特に最近、米國よりの注文が増し米國に於ける斯界に對する關心の弘まつてゐることが知られる。(4) 英譯出版に就ては一九〇九年、リス・デヴィズ夫人の長老尼偈英譯より一九五二年 I. B. Horner; *The Book of the Discipline (Cullavagga)*, vol. V. に至るまで四十七種となる。

(二) 未刊書。既刊書以外に現在、出版準備中のものに就つて述べれば次のやうな諸テキストがある。即ち *Apadāna Commentary*, *Kankhāvitarāṇī Manorathaparāṇī*, vol. V; *Theragāthā Commentary*, vol. III. のやうに Horner 氏は *Papañca-Sūdanī* (1933-1938), *Madhurathaviāsini* (1946), *Book of the Discipline*, I-V (1938-52) の校訂並びに著者として既に知られてゐる學者であるが、現在、従事してゐるのは中部ニカーヤの英譯である。中部ニカーヤ英譯は既に一九二六並一九二七年に Lord Chalmers が *Further Dialogues of the Buddha* として二巻出版してゐるが、Horner 氏はそれに更に詳細な研究を附しながら又、全く新しい構想を以て事に當つてゐる。例へば中部では禪定に關する所説が極めて多いのであるが此れに對して氏は第一巻(最初の五〇經)の序言に禪定の闡説の現はれてゐる箇所並に其の諸聯關についての注意すべき研究を附加してゐる如きである。禪定が中部ニカーヤの中心概念となつてゐることは争へない。

その他、梵語からの *Mahāvastu*, *Divyāvavāda* の英譯も着手せられてゐる。

(三) 「巴利三藏要語索引」 *Pali Tipitakam Concordance* ed.

by. E. M. Hare 出版事業。以上略述した既刊未刊書の成果の外、殊に世界の學界から注目を引くてある事業は Luzzac Company, London から出されてある「要語索引」の出版事業である。筆者は前記のリス・デヴィズの巴英辭典の再版の時と同じ様に前後して本索引をも協會より惠與せられたのであつた。

特に此の要語索引に就て述べて見る。キリスト教に於ては此の種の要語索引が聖書に關してなされてあることは衆知の如くである。クルーデンの其れなど優なる一つである。巴利テキストに關してはリス・デヴィズ巴英辭典とチルダグの其れとに於ては唯、語典を示すのみで經典的引用例は極めて不充分である。此れを補足するものとして出でたのが本辭典である。現在まで一九五二年—一九五三年までに第一—第三分冊が出された第一部は五十八頁、序説六頁よりなり、第二、第三部は六十四頁よりなる。編纂者 Hare は協會委員の構成員の一人であるが相應部英譯者として知られる F. L. Woodward 等の諸方に依つてなされつゝある。又、此の書の刊行の企畫はヴェーダの要語索引を企畫した第十九世紀後半にまで遡ることが出来る。併し體系的な仕事が復活したのは一九三二年リス・デヴィズ夫人の盡力を得た時であつた。而も途中、戦禍のため中絶し、一九五〇年になつて初めて校訂出版の仕事が Woodward の努力に依つて始められたのである。編纂の仕方に就ては種々な仕方があるのであるが例へば Cruden's Concordance of the Holy Scriptures の如き例がその最も良き範型となつてゐる様である。即ち文脈の量は最小限になし參照文獻は此れを最大限に於てなすといふ方法が此れである。實際、要語といふものは研究

者の便を考慮することが第一であつて、そこに與へられてゐる意味は極めて主要な意味が二、三與へられてゐるに過ぎないが、續いて與へられてゐる文脈、文例が自づと其の意味を理解せしめるであらう。特に此のことは、巴英辭典に依つて諸註釋よりの意味、合心、shades of meaning を知つた後に研究される時、極めて有益である。といふのは文脈が幾つか並列された場合、テキスト其のものに於て意圖された眞意が那邊にあるかを適格に知りうるからである。殊に巴利語のやうに梵語と違つた一種のプラクリットの性格を持つた言語に於て此の事は必要な操作である。それどころか、今や思想的巴利佛教研究といふ段階に入つた現在、單なる表面的語義分解以上に進んで思索的跡を巡らんとする上に不可缺の重要性を帯びてくるであらう。即ち問題はニカーヤを編纂せし人々の意味した意味を究めるよりも、却つて古代人の意識した意圖そのものを考究の對象とすることに於てある。その方向への良き資助たるものであらう。所引の諸資料の中、チャータカは其の偶のみから引用してゐるが、それは長行にあたる部分は經典の體裁をなしてゐないからである。ニツデーサも引用されてゐるが然し、實際は衆知の如くニツデーサは註釋であつて經典ではない。更に個有名詞は除外されておき、否定の形は別に出され又、動詞の種々形は凡て現在形で配置されてゐる。此の索引の校訂と同時に若干の書籍が今なほ表に加へられつゝある關係上、要語と共に其の複合詞體が與へられてゐない點は止むを得ない。此の索引完成後に其等複合詞體のインデックスを作るのが計畫通りに實施されるならば完璧なものとなるであらう。

(四) 巴利テキスト協会の教授。創設は衆知の如く一八八一年、リス・デーヴィズに依つてなされたが幾多の變遷を経て現在會長 William Stede の旁に H. W. Bailey; W. Norman Brown; E. M. Hare; Helmer Smith; Sir R. L. Turner; I. B. Horner その他セイロン、コロンボ、ラングーン等に客員教授を擁してゐる。前會長 Rouse は一九五一年に又、先述の要語索引に異常な功績を残した Woodward は一九五二年三月二十七日にタスマニヤに於て逝去した事が筆者の許へ通知せられた。謹んで彼の死を悼むと同時に偉大なる足跡の數々を偲ぶ。一九四一年に記した故リス・デーヴィズ夫人のレポートに依れば戰時中、爆撃の爲、Sacred Books of the Buddhists 並びに其他の諸外國より送られた資料も非常な損害を受け、協會は殆んど破滅に傾した。然るに上述の如く百三十六卷のテキスト、三十九卷の英譯、二十三部のジャーナルの保持、そのみでなく諸辭典の大作をなし遂げ、又、作し遂げつゝあることは賞讃の外はない。リス・デーヴィズ夫人が死の直前に、「私は律藏の最初の完譯を校訂出版してゐるところの I. B. Horner 氏を信頼すべき代理者として残すであらう」と書き遺した。現在、研究並びに諸事項の取きめなど凡ゆる範圍に於てホーナー氏の活躍は目覚ましく、メイスの *Artibus Asiae* Vol. X/2; XV, 4 に寄稿した二篇の論文 “Some Aspects of Movement in Early Buddhism” と並に “Early Buddhist Dhamma” とは多方面の巴利特に律の研究者としての面目を残りなく發揮してゐることを示してゐる。

巴利テキストの出版は本協会の外、最近はいンド、プーナの

Bhandarkar Oriental Institute からアツタサリニー、ガンマバタ、パーテイモッカ等の校訂本が續々出版されてゐる。偉れた點は無論見られるが、その註解的理解は巴利協會本に及ばなう。然しかかる二種の研究所によつて益々斯界の研究が其の精密さを増してゆくことは欣快に堪えなう。

(五) 其の他の状況。パドリー・テキスト・ソサイエティー以外に於ける佛教研究がオクスフォード、ケンブリッジ、ロンドンに行はれてゐるのは言ふまでもないが、簡單な點描は既に發表もされてゐる(印度學佛教學年報第一卷第二號中村元氏論文)。此の方面に就ては又、別の機會に詳細を記述してみたいと思ふが今は紙數の制限のため、たゞ巴利協會に限つておく。一、二の附加をなすならばロンドン大學の東洋・アフリカ學院 (School of Oriental and African Studies) に中邊分別論註第一章の譯者 D. I. Friedman が講師として印度哲學を講じてゐる。學院長 Sir Ralph Turner 並に書記長 Brownfield 兩氏からのレポートも近々手許に送られることになつてゐるが、それらをも参照して、更に詳述をしたいと考へる。

又、純學術的方面ではないが、ロンドンの The Buddhist Society の活躍も注目すべきであり、法句經の正規の講義が續けられ、ホーナー氏なども参加し、佛教への知識を一層高めつゝある。又、フィンランドの Nordberg 氏の努力に依つて、フィンランドに於て佛教がラヂオ放送を通じて講義せられることが許されたといふ事である。「フィンランドはヨーロッパに於ける我々よりも或る意味に於ては佛教的知識の普及に恵まれてゐる」とホーナー氏も書き送つて來てゐる。

以上、主として巴利テキスト協會について述べたのである。其他、印度に於けるヨーロッパの學者達の研究状況も注意すべきものがあるが凡て割愛せねばならない。

サンスクリット・チベット佛教に於てもさうである如く、パリー佛教に於ても先づ資料が公開されねばならない。然るに幸ひパリー學の方面では、かかる出版事業が著々と進められてゐ

ることは他にも類を見ない。少くともパリー學界に於ては、諸資料の出版のみならず更に進んで思想的研究が作されねばならぬ段階に到達したやうに思はれる。従來の如き單なる資料紹介に終らず、眞の意味で研究といはるべき勞作の出づるのを期して俟ちたい。(一九五三、一一)